津波27メートル 死者5万3000人

南海トラフ地震の発生で、三重県では何が起きるのか―。具体的にイメージできるよう、予想される事態のドキュメント記事を本紙取材班はまとめた。「死者5万3000人」などの数字は、2014年3月に県が公表した「理論上最大クラスの南海トラフ地震での被害想定」を基本としている。各地で起きる可能性がある出来事も加えた。毎月掲載する特集紙面「生きるために　南海トラフ地震」のスタートに当たり、この被害想定に立ち返る。

（南海トラフ地震三重取材班キャップ・大島康介）

◆被害想定の根拠◆

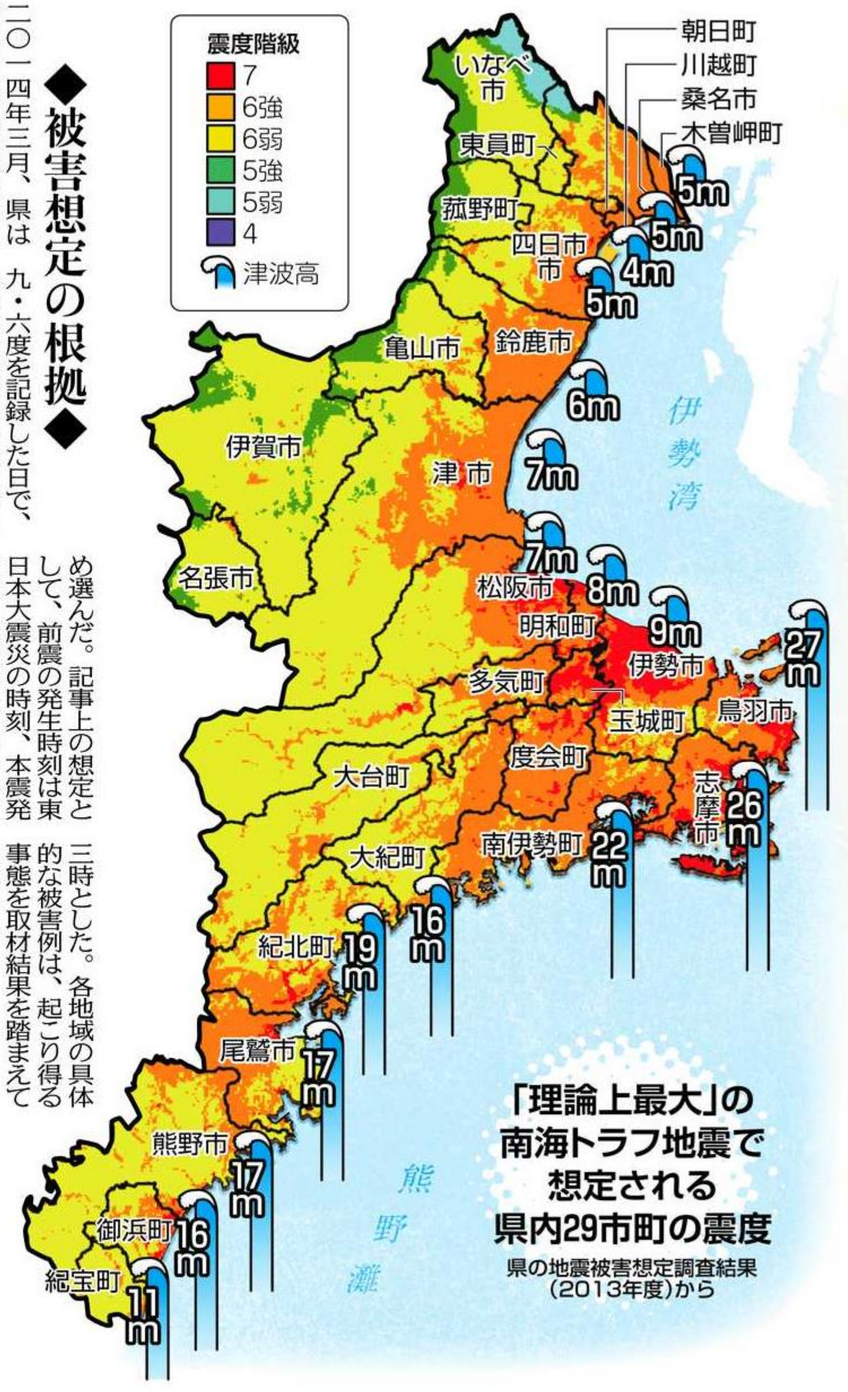
二〇一四年三月、県は「発生する確率は極めて低いものの理論上は起こりうる最大クラスの南海トラフ地震」の被害想定を発表した。一一年三月の東日本大震災が、数千年に一度の規模だったことを考慮した。この「理論上最大クラスの南海トラフ地震」は、真冬の深夜に発生した場合、最も死者が多くなると想定。自宅で眠る人が多く、冬の寒さで津波から逃げ遅れると予想されるためだ。

ドキュメント記事で発生日とした一月二十九日は県内で過去最低気温の氷点下九・六度を記録した日で、最も寒さが厳しい時期のため選んだ。記事上の想定として、前震の発生時刻は東日本大震災の時刻、本震発生時刻は眠る人が多い午前三時とした。各地域の具体的な被害例は、起こり得る事態を取材結果を踏まえて記述した。

「理論上最大」の南海トラフ地震で想定される県内29市町の死者数の最大値

	死者数	うち津波による死者数
志摩市	8700人	7700人
紀北町	8100	7900
伊勢市	7900	6000
尾鷲市	6700	6300
津市	6100	4900
南伊勢町	4400	4100
松阪市	3600	2100
四日市市	2400	1100
桑名市	1900	1600
鈴鹿市	1800	1300
大紀町	1300	1200
熊野市	1100	800
明和町	1000	700
紀宝町	1000	900
鳥羽市	900	700
御浜町	600	400
木曽岬町	500	500
川越町	400	400
玉城町	200	なし
多気町	100	なし
大台町	100	なし
度会町	100	なし
亀山市	80	なし
伊賀市	70	なし
朝日町	30	10
いなべ市	20	なし
東員町	20	なし
菰野町	20	なし
名張市	20	なし
合計	5万3000	4万2000

（2014年3月公表「県地震被害想定結果」から。端数の関係で市町別の人数の和と合計は一致しない）



「理論上最大」の南海トラフ地震で想定される県内29市町の震度

県の地震被害想定調査結果（2013年度）から

20XX年1月27日

14:46 静岡県の遠州灘沖でマグニチュード（M）6の地震が発生。津波は発生せず。県内も揺れるが、けが人なし。後に前震と判明

20XX年1月29日

03:00 M9の南海トラフ地震が発生。県全域で震度7か震度6強を観測。立つことのできない強い揺れが2～3分続く。多くの人が寝ていた

03:01 四日市市のコンビナートで、重油タンクに亀裂が入り漏れた燃料から出火。燃え広がる

03:02 震度7の尾鷲市で、耐震性に問題があるとされてきた市役所本庁舎が倒壊

03:03 揺れによって、伊勢市全域で県内最多の3万2000棟の建物が全壊。県全域で倒壊家屋の下敷きになり9700人が死亡

03:04 県内で最も早く、尾鷲市と熊野市に高さ1メートルの津波が到達

03:05 軟弱な地盤の地域で、液状化現象が相次ぐ。津市の国道23号では道路のアスファルトが割れてガソリン輸送車が横転、炎上する事故が起きる

03:10 漏電などで倒壊家屋から火災が発生。火災による死者は県全域で1900人に達する

03:11 県全域で停電と断水が発生。消火活動が十分にできなくなる

03:18 熊野市で津波の高さが10メートルを超える

03:19 志摩市で津波の高さが20メートルに。県内最多の8700人が死亡。紀北町では町役場の周辺など人口密集地まで浸水。町人口の半数以上が死亡する。鳥羽市では津波が県内最高の27メートルを記録

03:28 熊野灘の沿岸で伊勢エビ漁に出ていた多くの漁船が行方不明に

03:36 伊勢市で高さ1メートルの津波を観測。旧二見町の旅館街が巻き込まれる

04:33 松阪市や津市にも高さ1メートルの津波が到達。伊勢湾岸は最奥部の桑名市を含む全域が浸水

04:44 伊勢市の津波が高さ5メートル超に。伊勢神宮外宮まで水が届く。津波による死者は県全域で4万2000人にのぼる

06:55 日の出。ここまで地震、津波の被害の全容が分からず、救助作業などは手探り。地震による土砂崩れで道路がふさがり、大紀町の錦地区など県南部の多くの沿岸部が孤立する

17:00 県全域で75万7000人が避難者となる。多くの人が車での寝泊まり（車中泊）となる

「想定外」許されぬ

三重大　川口准教授に聞く

四年前に県が公表した「理論上最大クラスの南海トラフ地震の被害想定」を、県民はどうとらえればいいのか。県の「防災・減災対策検討会議」の委員として、被害想定の作成に関わった三重大（津市）の川口淳准教授に聞いた。

◇

防災に関する原則の一つに「最悪の事態を想定する」があります。東日本大震災を受け、鈴木英敬知事の指示で二〇一四年にまとめられた「理論上最大クラスの南海トラフ地震の被害想定」は、まさに最悪の事態を表現したものです。ありえない想定だと、無視しないでもらいたい。

震度の大きさに加えて、津波の高さや到達時間、浸水範囲など、最悪の場合で各地域に何が起きるかが示してあります。まずは、この被害想定を頭に入れてほしい。もはや「想定外」と言うのは許されません。自分の周りに、どんな危険があるのかを考えるきっかけにしてほしいと思います。

津波から逃げるには、どうしたらいいかを考えるのが次のステップになります。死者の八割が津波が原因と予想されています。被害想定を見れば、「どこへ、何分後までに逃げればいいか」が分かります。自分が滞在する場所ごとに避難計画を作っておけば、すぐに逃げることができます。私は「Myまっぷラン」と呼び、県内に広める取り組みをしています。

かわぐち・じゅん　三重大の大学院工学研究科に所属。専門は建築物の耐震設計。県防災会議など多くの委員を務める。「防災のかかりつけ医」を名乗り、地域住民からの幅広い相談にも乗る。1965年9月、名古屋市生まれ。

特集、関連記事 伝えます

30年以内に70～80％の確率で起きるとされる南海トラフ地震。中日新聞は県内の記者で取材班を結成しました。多くの人が対策に生かせるような紙面作りを目指します。合言葉は「生きるために」。月1回の特集のほか、関連記事でも詳しく報じていきます。